

地域の誇り アイデンティティ の創出

六齋に関わる意識の変化

子ども六齋会に参加する子どもたちは、地域の伝統芸能を継承、誇りやアイデンティティを守るということよりも、子どもたちは自己表現のために参加している傾向が強くなっています。1993年（平成5年）、吉祥院小学校教職員が地区の子どもたちに自分たちの住むまちの歴史や、地域に伝わる六齋について、六齋壁新聞にまとめるなど、いわゆる、すそ野学習の一貫として子ども六齋会がスタートしました。1995年（平成7年）発足当初、子ども六齋会に参加する子どもたちの意識は、地域の伝統芸能を守るという意識は少なく、友達と一緒に習えて楽しい、大勢の前で太鼓を叩けて嬉しい、お母さんが誉めてくれるから、練習に来たらジュースを飲めるからという意見が多くあります。このように子どもたちの世代においては、自己実現のための参加の傾向が強くなっています。



リベレーションフェスタに子ども六齋会が出演



緊張して出番を待つ子どもたち（吉祥院天満宮）



写真左：中村秋吉氏
写真右：永田勲孝氏
清水寺六齋奉納

子ども六齋会の発足に指導者として携わっていた中村秋吉氏（当時子ども六齋会運営委員長）は、「小学生への教え方が難しい、厳しく教えると泣き出す子や、甘くすると稽古をしないで遊んでばかり、教え方に苦労した。最近では、吉祥院天満宮への六齋奉納で拍

手をもらえるのが嬉しいと話す子も増えた。はじめは興味関心や拍手をもらうことの楽しさを覚えてもらって、その後も丁寧に指導しつつも、時には厳しく指導している」と教えることの難しさを話されました。



永松教育センターで初披露（子ども六齋）

柱となる指導方針

一貫した育成指導の骨格を明確にするため柱となる指導方針が必要になります。言い換えれば、そのことは六斎の伝承、発展を常に視野に置きつつ、子どもたちの主体性を重視し、六斎の歴史や技術向上を促進するための一貫した指導のあり方が重要になります。



- 六斎の諸道具等を大切にする「心」
- 始まりと終わりの挨拶する「礼儀」
- 千年以上続く伝統芸能の「重み」、自分たちの住むまちの伝統芸能を「継承」
- その文化財を継承する「誇り」
- 自らの意思と判断に基づいて練習し、自主性・主体性をもって頑張れる子どもたちを育てる。

指導にあたる関係者は、一貫した指導指針に基づいて指導を展開することが望ましいと考えます。

